一編五
へ13
3567
10

門 13
號 3567
卷 10

早稲田大學図書館
昭和 34.6.3 受
藏書

近世説美少年録第二輯巻之五

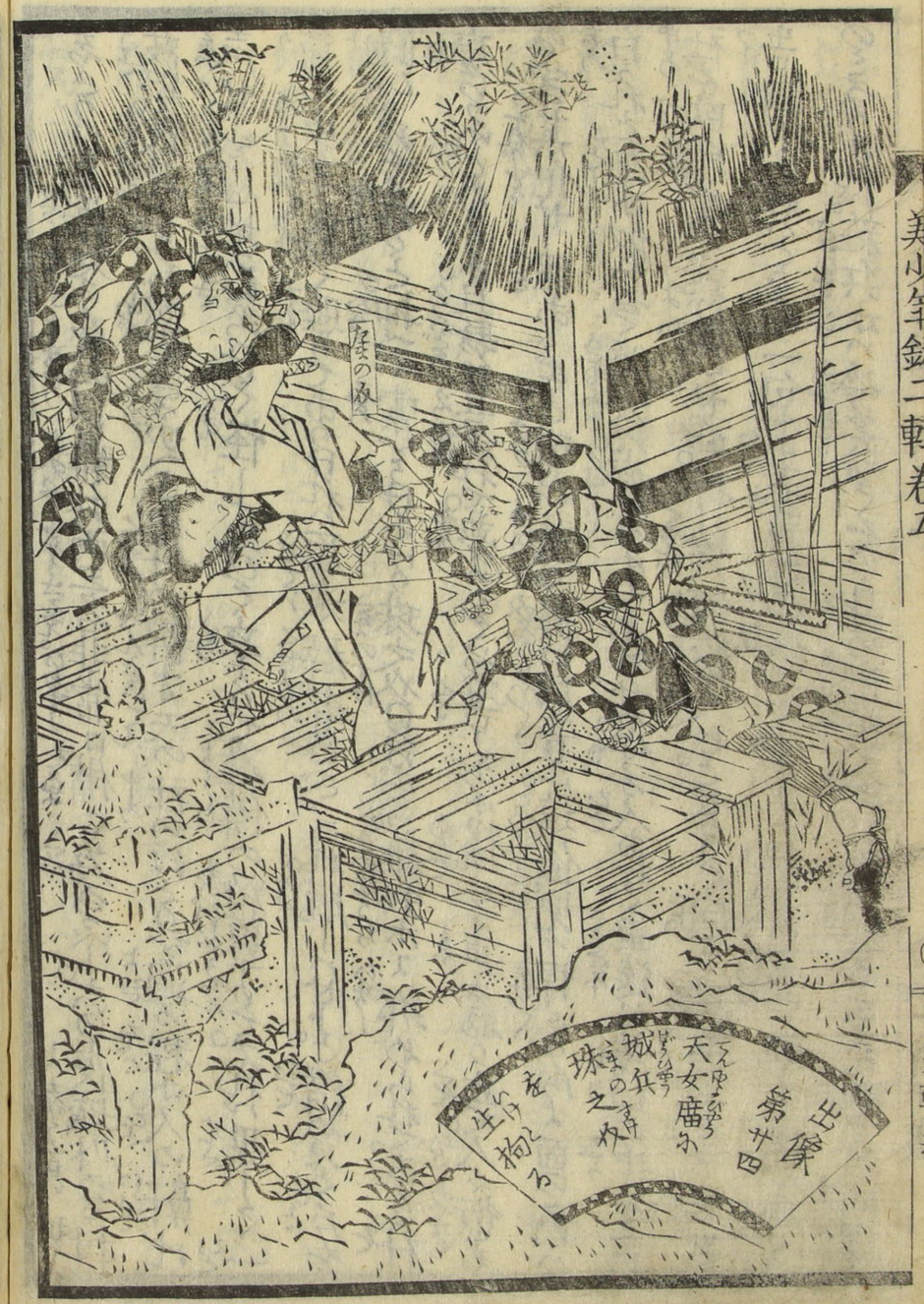
東都　曲亭主人編次

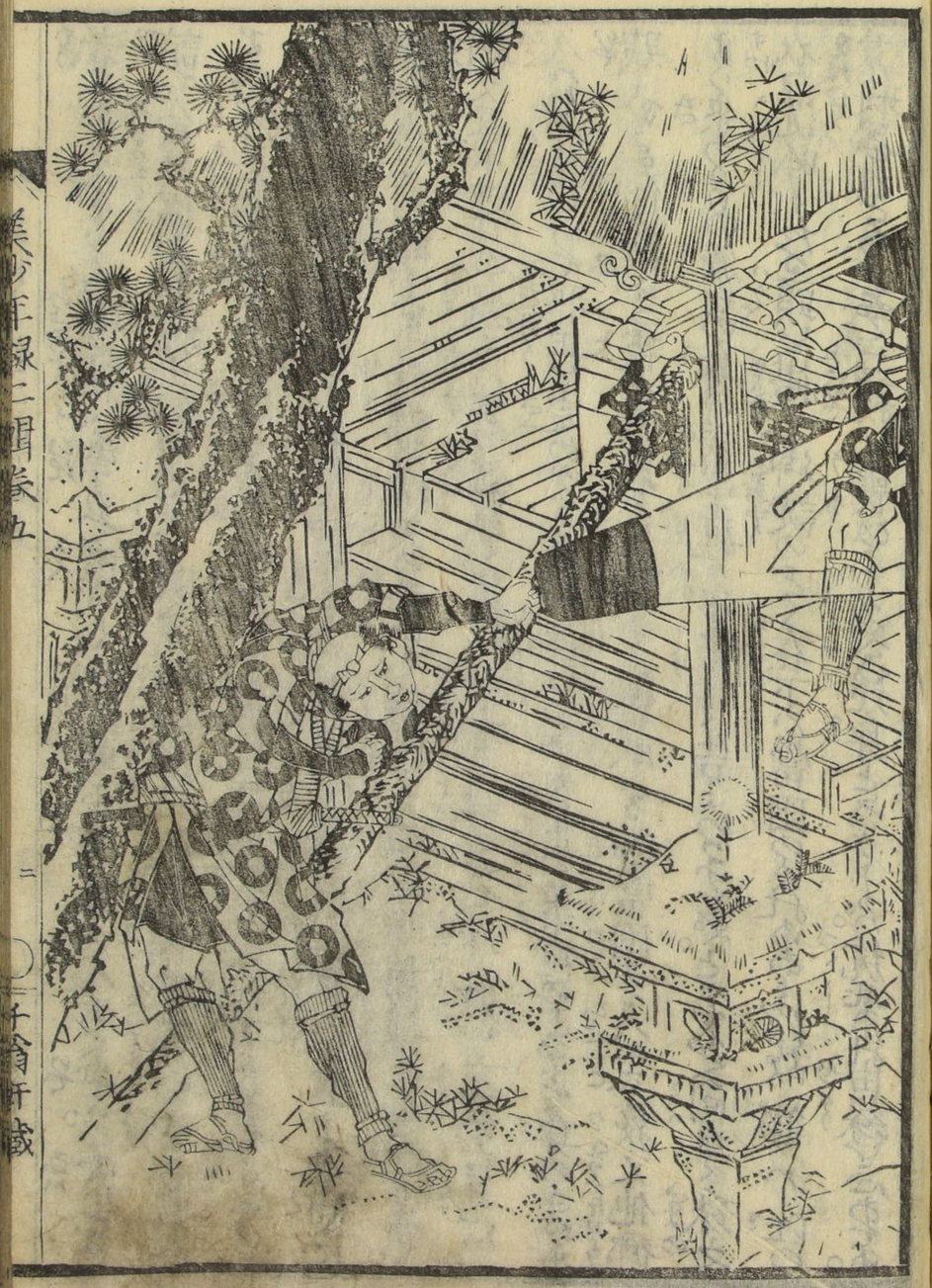
第十九回　茂林社に悪少捕らはる　三石城に叔姪再會せ

再説末松珠之介ハ。嚮に危窮に及び折脱れ難ほて大洋へ身を捨てゝそ浮む瀬のあれば荒磯に流れ寓て死ざることを得たれども人にも遇ず言問ん浦の苫屋もなかりしかば。覚束なくも辿々てゆくこと幾十町なるを知らず。夜々最いこう深たる比前路遥に燈火の光隠々とみえて幽え原来那首に人ハ住むらぬ呼覚し宿りを投めて。一椀の飯をも乞ふべく。地方の名をも問ばや。と思へば疲労れ足も進まて。辿り著いてあまたをみるに人の家にハあらずして。茂林の中にいと舊りたる社に点せし常夜燈の。樹の間を漏りてみえたるなれを守る人もあらばれば進ま

近つ江月光ホ且その禮ヲ瞻仰るホ辨才天と聿ー云白字の匾額ありけるホ。
あの社の造りざまも皇國の神社佛閣ホ異ることのうつうつしさも猶外嶋ホくも。
ほとゝぎす献供る一土器の夏桃と野胤の喫残ーたる一枚の餅ありて久ー敷く餓
堪ぐこゝろホよ紀物ゆゝと遽ーくこゝろ卸七ぬ。
時ホハ何まれかまれ皆甘うべとホとるれが雫時も置ま早ホ盡ヲ聊餓ヲ凌
紀ー州ベ坐ー七暁るヲ俟程ホこゝろぐうこゝろ思惟るホ。そゝくと乾浄る茂林の中
ホハあるれども神前ホ供物あり。常夜燈ヲ置れヲ。お人が人家ヲ遠くもあゝぞ尽ハ
詣る人もあるべー夫も明ぐそゝるホ到ヲそ良哀ヲ告るが情ある人の資ホあゝとのホの
せんと。ま尊思ヲゝ身ホよる彫脚ヲ拂ホるもの果ハ動ざる隨ホ疲労く熟睡ヲ

あくうけり浩処ホ夜行の雑兵両三名非常ホ備る為るべーホの夜城ホある村
落ヲ彼此とうち巡りる。ゆゝさホ件の辨才天の社のほうヲ過る程ホ人の鼾ヲ
声せーヲ忽地ホ笞つけく怪ーとハゝく立よりそ准備の燈臺めてれバ果ーく一
箇の少年。熟く睡りそありけれ原来癖者どざゝれ脱ーハせーと潜めヲく石ヲ
踐ひらゝて歩々と押へく索ヲうけホけり珠之双ハゆゝぎも雑兵ホ縛められてありけり
麿うホと云うホ且駭紀且呆れて夢うとぞゆの音ーちホ忙ゝる声ヲ聴り立て人々衆ヲ
のよる某犯せー罪あらぎと叫ぶ聴で異口同音ホ這倫児が悍々りホよ面の色ハ
白うれと年ホ似ずく膽太ク癖者ホあらざうせが守る人もなく里遠ク茂理の中ゐる古
社ヲ臥所ホあそ熟睡ヲせゝ。抑汝ハ何処の人ぞと。せうく問るヲ珠之双ハ袁の実ヲ
生ホ難くそれハとぞうり一句も出ぎ。黄壁ヲ紙うー唖子ホ似て只唇ヲ動ーの睛ヲ睜る
のゝうりけれバ。雑兵ホハ冷笑ひく。その身の出処ヲ沼いうゐの間でもあるを敵ぐの間諜


出像
第廿四
天女廟ニ
城兵
珠之夜
を
生拘る



者ホおらんぞらん誘城中人季めそ深くく御
詰て会共侶ホもく程ホ途ゆくく天ハ明ケ。却説件の雑兵ホハ珠之次を牽てそのへ
行ク。綽二云ケと答えあげ城主の坐るを俟けるホおの日ハ民の訟の生平よりもヨヌかと
けれど城主のその稍果一未の比ホ珠之次を向注所の坪の内へ牽ハさせそうを向ホに
雑兵ホハその暗ぎくホ茂林の岸天の社ホく捌捕う縛の趣箇様々と述もるく。
猶又具ホ述けを城主ハ笑ハ領ケくもを孔癖者と呼かけて珠之次を左見右見ハ。
人ハその貌をもて耶正を定めがくけれども汝ハ口その容止の美ハ纪のこるくで身のざるも
賤しかるを何の故ホう夜をホめて古廟の中ホ獨臥こる柳當囮るう人の子欤又他郷
より来つるめ欤その身の素ホ生姓々名を隠ぎ生ロよりつホそ。とまもく問れく珠之
次ハ沈吟一たる頭を擡て御詭のごく在下ハ當囮のの孔ホあらくく故郷ハ江の
其村ハれども。もく二親を喪ひくよるべる兄身とるりーバ筑紫ホ曲縁を心そホ。

浪速の浦より便船を遥ケ浪路をゆく程ホ昼寒風ホその船酔ケて皆大洋ホ
沈こし折在下ハ幸ひホ板子ホ携り潮ホ任して流れく洪波ホ打揚られホの地の
浦ハ富るとそ伏。一旦息絶ゆハーを又幸ひな甦生りく四下をるませ口屋もあらず。
其処を何囮と知るようるけれど人ホあらんと岩ハく月を燭ホ幾十町をう。来つ疲労
まこ樹間るホ社ホ憩ひくもうるく。委時目睡こる程ホ覇兵連ホ怪められく搦
捕られ兵在下素より犯せる罪るー衣の濡れを乾されども潮ホ氣ハ耗せず己ホ
濕れりまこ證ホ賢察あらこ免さをのこと
るをうけ城主ハ頭をうち掉く入水のるまれハ搦て汝ぞまうこ趣実
ーハくぞ胡論ハ憑ぎと稟せうふぞや。と問をを珠之次推返こて御詭でらへどもうでる
詳詭をヲンあぐ兵幾遍問せるよも外ホ情由ゆぞとのをも敢び声ハう立て這
奴甚大膽ぞその蒼里ハ近江るホ某村ホく父母を喪ひ身のよるべる兄随ホ筑紫の

由縁を訪んとて渡海の便船せんとするに賤民の孤ゆく尤難義の旅なるべし命ふ
身のざる相応ゆゑ上ゆく練の單衣虐ゆ著ゆく越後麻の襦袴にてありつゝ言
と形状と齟齬せる旦詭言の明徴ゆ憶ゆ敵の多聞者故ゆゑ別ゆ情由あ
らん今飽まで歐懲さざるゆゑ実を吐くべし死者共其奴の答を當とし列ゆ記下
知ゆ雑兵ゆ美りつと心ゆ果ゞ左右齊一珠之玫を引捕へ推俯く答を揚ゝ二
三十背をのゝく打ゆ珠之玫の皮破ゞ肉ゆ
ゞそ十あげいん答を放べきのゝと叫べさそゝと雑兵ゆ引起ゝ推居ゝ登時珠
之玫の息を吻ゝ蛇ゆ又上座ゆち裝ひ方の地を何國とまざ知らべる後難を測
ゆく一旦欺ゞせ共賢察の明ゆ鏡ゆ向ゆ異ゝゆゆ隠ゆ果べうもゆゆぞ
ぞや実支を告ならん在下ゆ末松氏琳之玫と呼ゆの年十六ゆゆ侍ゞ管
領高國入道の權臣でゆひ香西四郎左衛門尉元盛ゆ身邊近く使れて年来

京師ゆ於ゝ死人ゆ山ゆゆゆ三元盛ゆ阿波へ使を送ゆ其ゆ美ゆそ彼地へ赴ゞそ玫ゆ来ゆ在下ゆも
倶ゞせられ船を尼崎ゆ返せ折ゞ元盛逆謀あるよし人ゆ説言せられん數百の討兵を
差向られ陸ゆも寄せざ船中ゆく主後九百名ゆゆ討捕られひゞそゝ折ゆ在下そ
ゞゆも海ゆ飛入ゞ脱れてゆの地へ流寓りる。そゝ縛の趣ゆ向ゆゆゞせゆ違ゆそゝゆ
一旦詭りいゝゆの所ゆも亦管領の御方の城地ゆゆん欤と竊ゆ陥ゞ入べゆゆれども
元盛逆謀ゆゝよの越度ありとも在下ゆゝゞ一毫ゆも預知ゝべゞゆゝゆゆ憐
愍を願ゆゆゝゞゆゆ城主ゆ驚ゞそ原来汝ゆ管領の權臣と称ゞそ本国西ゆ扈従ゆり
けるゆゆ則備前州三石の城ゆゞ七赤松家臣ゆ来邑られゆ故管領澄元ゆゞ赤松
嫡ゆ好ゆゆゆ知ゞそ先君赤松政則朝臣ゆ後室ゆ勝元朝臣ゆ息女ゆく洞仙院尼
即ゆそゆれゆ高國入道ゆ送恨そゞれ親一ゆゞそ。さゞれ件ゆ元盛ゆ民ゞ虐げ驕を
極ゆ仁者ゞと人倫ゆ縁て容ざるゆゆもゆれゆそゆ滅亡ゆけるとゆゆれ亦その非を

正志あらば綱る京師の光景を問まく欲よりある汝詳かに告べきやと問へば珠之丞歎びく原来其の地へ備前る三石と申すんよい故只今の仰を再生る心地そする何と答えも問せぬ知る限告まらんと答ふ城主ハ領そやと殿兵衛ハ追少年を飯を食せ勤り奥庭る折戸の邊ふ抜そ出ると毎に憑ぎ報るべ命を助るのみそ厚く恵みそ盤纏を取せん紙るを詭りそれを欺く多あるべ近屬沿る新刀あり立地と頸斬落りその鋭鈍を錐んの三且よくまの美紙をあろ沿て姑く索を放もべ然ばとて由断てさる逃ーをあろ沿る狡と二甘せぬ雑兵一詭る及ばぎ又遠く左右より珠之丞を引立て外面投て歩けり却説城主も退給ふ只ハ稍未閊過る此件の刀を携て獨奥庭のある縁頬る坐れば雑兵ホい既ホ多。折戸の裡面る樹下る珠之丞ハ凝滞其彼ハ係々筒様々々と曲ゑたく雑兵ホるち對ひそれ今寵ホまの少年ホ向んと答る答ヨヌの汝達を退

答て庭口を守れーとくと言ひせべ急ぎ当下城主ハ珠之丞京師の光景世の雑説をそれ彼とうく詭る珠之丞ハ凝滞其彼ハ係々筒様々々と曲ゑたく詭る時分ハ珠之丞ハ奴れる声を背立てそこ皆汝ハ聞ホ言ふれ答る此旧若ふそ那首の光景風声ま聞ホ定ホ拵てる答そ今試ま汝ホ向ホまその言ハ摠さ同ドホ多ホれば郷ホ元盛ハ扈従ふ汝ホ詭辨ゆくふれを欺くのふべ。ふそ推ま立ふ汝ホ敵の刺客ふれホ近つ元刺殺さえと欲まるホそあらんまそふ今ハも免ーべさー觀念せよと敦圍て足踏被る庭下駄の音ハ高くもち立て引抜うける素韈の刀を見ハと抜るも元ま珠之丞ハ目ホ則へ刀ホ丁と突首ま元ホ咄嗟と思へど必死の覚期ホ眴つ多ホ此一も騒ぎ変時気色を顕まく。ろくもせぬ冷笑ひ刀孫そを理ふ元御短慮るん在下ハ僻ホ見違へる牧知ぎ仕ま多ホ向せぬ今ホ京師のふ今ホ詭飾そ何でホ孫を欺くべ然るを

なほ疑ひて見ずから殺さんと敦圉ものは吾命運の竭る所逃るとも脱しあへず覚
期したる死ぬれば見事く首を召れよと頭を伸し合掌をし悍く答てつゝ城主は猶も
憖起てゐたりしが及ばじと刀を引く後に立るこゑをかけて殺さんとはせしが両三回にまで動ぜず
珠之介を左見右見つ感嘆して姿態優美なる少年の有繋また武く勇あり。命
惜ぬ今般の進止現に奥房が猶子なりと蓍言る辞は珠之介は詐りならずとおもふ今
與房と宣ひしは大内殿の家臣にて。左界の浦の戦ひに漁の水屑となりしと風の便りに
聞えたるぞかし旧名は瀬十郎陶駿河守与房が事なり。あなかしこと向ふ間に遽しく刀を
斂め引よせてやよ珠之介それこそ汝が叔父なれ與房は。御身に欠と貝向ひし折木松
珠之介と名告りしかば右ぞ猶子にあらずとも心をゆるしもりぞ且その面をよくつくづく
巣して眉上に黒子あり。またそも卿の索を解しつゝ奥庭へ召よせて文その
些も違はぞ右手の甲に一文字の痣さへあれば疑ひは稍解たれども尚浅からず生育て

心織く浮世めく。吾が名告るも要なし。辞して答へんと尋思をしつ。陽に強顔
の色もなく殺さんとまで權せしは武弁の家に仕へる甲斐あればこそ必死を究めて刃に
怕れぬ大夫の心魂叶感するに餘りあり。相別れしより十とせあまり四捻になりぬ汝が二
親は恙もあらで京師に處る歟母の阿夏が云云とつげざるも又その甲なる痣をしも及ばぬ
叔侄の名告をせよと論しけん非徴は是ぞと珠之介が右の手首引よせてその身の
左の手の甲と合してみせたる、これは現割符に似たる假黒子一字千金二ツ合體三
千世界に類なき是再會の像見ずとも潜め名告る骨肉の誠あるに顯れて悦べ
難く共侶に落る涙の珠之介も縦しきと泉しあまりて携へつゝ向上て原来あん
身は小父の刀禰與房ぬしにておはせしか。然なれば備前の三石なる冥土の阡陌三途河
ほとりあひたてまつらむや。かれ身は四捻前つ比左界の戦ひに敗れ折しも船覆りて波の底に没
あひしと傳へきこえ。聞ひつけるなれ再會は故ありてこそあらめ顛末を告て惑ひを解てよとせき

あく問へべきもと現理りある雨が凝し世の死せうと思られ。
奥房が存命て四稔をまの詳ふ告んぬ往時左兎の退口を御方の
船へ風波ふ或ら被られ覆へそ妻子後類士卒まそく魚腹ふ葬られ奥
房が来ると。雑兵の舩と二艘のこ命つれるく真金ぬく吉備の前るの地の
浦ふ辛くも流れ寓へりぐでられ曾松菅の恥を雪めて左兎の城を再ごりも復こ
むご主君ふ見参を表くぎ況周防へ阿容々々と信ぜ下とりつつ。潜びてけまぞおこ
在り故も這備前州の赤松家義政村ふ至る。の来地られば家臣浦上掃部助宗
村これを支配しそのの子浦上備前守隆宗をの七三石の城主ふもるそ彼宗村の
豫てよりぎ主君大内殿へ内存の志を顕し他事るく告えしよりもあれりられ苦
ず隆宗の資を以そ城ふ迫ら合戦の美を謨るとくども戦世の沿習ふそ赤松
家も亦ヨヌ事るふ宗村ふ京師へも疎うまそあく首鼠両端の意味あれ。

うぎ為ふのこ力を用ぶぎ。ふの故ふりぎ宿望六画餅とるりう。拷縄の長を光門を送ふ
う近属ふくと周防へ告えく帰参れと叮嚀ふ仰下されりけれども尚志ぐたるるも
ふ今ばら帰参ら面ぎるり。いくゆせます。と程ふ這三石の城主る浦上隆宗ふ
所要ありて播磨へ赴元るふより。奥房城を預りそ敵地の備由断るく民の訴をき又聴
定めそ。隆宗の還るをまち折別れて艱の年を歴て送ふ面を認らぎるりくる爾ふ名生ら
舎くるら号切てのものふくく死奴を不幸と思ひよ存命ぎけよ相見んその歳月ら異
るれども叔任共ふ入水して等類ふみる死たるふ其身々々ふ恙るく。備前の三
石ふ流寓てい奇るふら教ふ就て又みやふの天もるつかそそ爾ふりるふ由
縁ありそ。那香西ふ仕へるその匂の来歴親のの詳ふ知せよらふぐそと問ば答ら武
夫の猛死ろも恩愛と情義ふ脆ら神の露置くとるふふと敏ら言の華末に
あまりけり。珠之双ふたぐと答ら瞼を押拭ひて有如之べとふ知ぎそ。母れと共ふ最

大う。苦〳〵死客宿をせ〳〵ゆわりそうその次ぶ告まつらん仏のそ〳〵その比の親の苦労の年
長て給ふるそうがうん匂が猛ぶ山口へと返されぬひ〳〵年の秋家尊と異母ある女
兄さえ非命ぶあの世と去り給ひ亡後江近江る福富とぶ片山里ぶ憂ル歳月を送の
なる母ぶの艱苦。吾伜のうへの首そのべが箇様々々と木偶奴ぐの小夏ぐうぶ
忌む〳〵死のべ比皆省略そのそとる。大夫次が情ぬそ年来那首ぶ養れるそとそのうそ
送もうく周防の客宿ぶ盤纏竭て困ぶ射至極をうう〳〵折料らぎ辛踏兄四郎ぶ環
ぴあ〳〵次貫を泊そ母子京師ぶ伴ま阿夏べ又兄四郎ぐ故郷へ還るぶ伴れて陸奥へぐぶ
卦を珠之次ぶ兼顕卿の愛顧ぶよりて京師ぶ留り職原諸礼を見習ふく且く彼
卿ぶ仕る程ぶ香西元盛ぶ懇望せられて又そ家ぶ仕へるぶの幾條の長ぶの語れ
始終りを漏さず増さぎうとそ周防の一段ぶ今そるごとく辞を連ねてべもあられぶ告〳〵
ぬぐ奥房ぶ皆く支母ぶ我ぶ驚ぶそ我ぶ感ぐそ且歎息するこ平晌そろ又死るをを

稍釋ぶ憐む〳〵木偶奴小夏べ山高豪のるぶかけられて命そろうくなりみるよ
よろの後阿夏ぐ難人の情ぬ匂を寓せ爾を守も育うる數年ぬ苦労然ぞ
あうん加以周防まぞ母子諮て来〳〵甲斐もあよりもるく人伴ぶ計音の告そ〳〵折の
ぞろうち今ぢぶ汲そぞ彼室津海の千俣の底も數るぶぞとれの〳〵那地ぶ在る
らぶ面會悌あとそる左も右もと取らせん悔て返らあのるぶ甚麼る屋の循
ぴ来て活を殺〳〵を出来りけんあうわれるも幸ひる辛踏氏ぶ再會〳〵伴そ〳〵ぶ
うぶ阿夏べ其処ぶよるぶぞ定め給ふ渠ぐ故郷へ赴そる事の情を猜そる本意ぬ
あらんぢぶのぶの木偶奴ぶ別れ〳〵よう十稔ぬまうの艱苦を辞せず久〳〵宮奉婦の
稚児を守育〳〵の與房ぶのぞ母もあうべ〳〵やたれも女と必ず〳〵ぬの空とるそよる絶
たる匂のまべるぶ再縁〳〵を結びけん情義ぶ陳〳〵とのべらぶ那兄四郎をひぶ雷同
友永正の比深草ゆく心あ〳〵よ〳〵支あれの覚ぶそのぎを任〳〵けんぞも亦公まれ

ろうにはるゆそも那福富とうの郷民ども阿夏母子ゝ養ひいたく俠気あるゆゑ
兼顕卿のあん庇蔭ありてそれゆゑも優て有ぐこゝまで厚礼も今はうゆゑ欲じをまう
もべ乞便著もあり忠なるゆたるゆゑ流寓の定めの乞
世ゆゑなる乞身の性方て乞悲けれ嗚呼何とせんそのうゆ夏愛苦ゆ堪れぬ涙塩草
ゆゑ口説る壮士がおゆ恨をゆる乞のうゆゑ佛生山ゆ七秘の仇を
両個の夫かさ又元四郎ゆ遭一夜の情由を知らねば迷ゆ歎乞の霧ゞ深ゆり
ける。叔父の心を推量。珠之双ゝ涙うちかこち乞ひけるに御孔遠懐然る乞あゝろは
まゝはさゆ今ようちゆゆ弟子て左兎の城を攻めの旨ゆ第一番ゝ先駈を戦殺せゞ
那辺の理苦ゆるゆ伝のてんとの弐を乞ひ乞勇むを兵房推禁ゆそ。噫声高
し。何をうゆや左兎ゆ主君のあん為ゆ孤城乞ゆ成ゞ攻るとおゝべゞとのゆる
日仰下されまゝゆ又いゆともせん方ゝ。ゆゑ四捨先つ比ゆ妻をも及獨子ゆ房子

凡も那浦ゆそ水屑と言ゝる乞よりゝ以来心の真愛苦ゆ淡雪の消ゆるゆろに積れ
どもそを厭心ゆゆゆも。介ゆゆ雨と不憶く再會せゝ迭の飲び今の世ゆ只叔父ひ
とう。侄ひとうなるゆゆおれゞ養ひとうそ弓盆前を倍へ家を紹るゆゑ乞ゝべ幸な乞
中の幸乞れども左兎の城を喪ふ乞。衍ゆゆ身を恥て他御ゆ難せゝられるゆふゞゆ私の
家の為ゆ子を養ゞ貰ろ。これゆゆふゞ似て不忠ゝ縁ゝこの乞を免されて類るゆゆあを
三も雨をちゆ曲ゆゞろ。そをゆゞ心ゆゆ差ゆゆ舊衍れゞそゝ必ゆ恨をそゝのゆ
まそゆる乞珠之双ゝ沈吟ゞたる頭を撞て五ゆ倫をちゆ曲ゆゞろと宣ゆゆ事
情を知るゝ乞れども過世の約束ゆけん仙孔と乞別れる亡親よりも
今かゝくゞゞゝおん身ゆ一日も親ゝ事ゆゞゝ侄なる甲斐もあゞゞゝ柱て許させ給
ねと口説ゝを聴ゆ頭を掉ゝ愚心珠之双武運ゞそゝ年老て坐席の中ゆそ身ま
かるゝゞゞ末期の水をそゝせんぞと逆ゞゞ妻と子を先そゝ今送る乞ゆ再會測を

千翁軒藏

修理亮実朝卿五郎朝長の兄民部少輔朝宗の子肩谷の名字武蔵州入間郡河越の城主天文六年四月卒

かくと侭へとゞめ置ぬるを追遣るのみあるべきやうを遠離るゝ武士の義理公道人情両ながら全うまぎらはしきものなるを愛惜せんに甚ひとしからぬ相別るゝとも隔が久後心かからぬやうにぞ東国へ萬遣しと仕宮の途を開くべし故管領憲実ぬしの主君の身を寓せられ比世を逝りたまひぬれば其の内縁を今も鎌倉の両管領も與房あるを知せものから就中肩谷朝臣の父播中守にて年来相識る者ヨヽろ那家ゆゑ衰へく今は武蔵と上野の二ヶ国を過されば武の河踰を在城とするは北條家ゆゑ戦ひのち然けれども舊家ゆゑ世々管領の貴族なれば関東の武士これ彼と志を運ぶの少くまたなえうのかれば又遠うもなきあをよりて爾を紹介して河踰へ遣まべく朝臣與朝臣を主とし憑をそ名を揚家を興ハねがはくは又今よりも東西千里の別ゆゑれば相見んことを願ふまで誌て遣むぬ

数ヶ條ありとこれにうくと爾をそゝのかすゆゑの容止醜ゝまで世ゆゑ美男たるものゝ色の為に生涯を煩ひ往々ヨヽの人これ亦その身の不幸とならずヤ又爾ハ能辯ゆゑ頓智才覚ありとかゞヤヨヽ辯ハ且つ徳の害之黙ハつゝしみて徳を脩るゆゑ不如才あるものゝ自負て行状宜しからざるヨヽり周公のオの美るも驕且吝ならばその餘ハえるゆゑ足らざるとこそ爾ゝ主ある元盛も驕且吝ゆゑ忠実我ゆゑ疎ゝれのめるゝ那城亡ゆゑ及ぶべうもなし爾もこれを習ふくふと貪り驕を退ると思ふ一旦権を執るとありとも又元盛のごとくべし世ゆゑ淫薄るるものゝ色を好こと甚ゝ故ゆゑ礼儀を疎ゝれ礼ゆゑ貴賤を序ゆゑ曲尺一分ハ則寸ゆゑ及ぶぎ且ようこの義をうけたまはりて分限を守るべし

かくいふこれも亦少くて時行心をうるこれ時の衰世ゆゑ免さることありとその改せざる何の益のあらんこれを壁言ハ嫉樹の幹ゆゑ細小なる疵をつくるが如くその樹大くなるとも枯も亦隨ゝ大きうるゆゑとかものゝ改めざるゆゑその衰

大じなりて死後まで恥の亡ぎ語なりと今悔る所なりて聊爾に示せしは智仁勇の三徳も忠信孝悌の八行も自然と人の心に備はれども学びて磨ざれば五常八行顕はれず悪趣に染り易けれ和漢今昔一致なり奥房が如きも其比の行迹今ぞ知る人ぞなけれども竊に心に恥ざりし徒の術を知るゆゑに今ハ術心鮮に余ハ聞えず ら撰くよりや忠信の狗とならても乱離の人となられぬかると教を説諭せし珠之丞ハ胸前を錐もて刺るゝ心地して慚愧後悔限りなく思ひしぞ七居たる登時奥房ハ外面にうち対ひて常もうち鳴らせば庭門に退き居る猩兵衛斉一同と答て遽しく来りけるを奥も間近く呼よせて彼の少年の来歴をかれ具に糾問せしに素是東国の者ならねど親ハ旧友なりとて其立人を隷て旧里に送遣りし今宵ハ城中に留め置くべきなれども下知を俟べし等閑なきものせと叮嚀に命ずれバ猩兵衛ハ会釈して珠之丞をいざなひて退けり有之而又奥房ハ腹心の老兵二名に珠之丞が為に其路示して笠草鞋の類まで客装の准備をなさしめ扇谷家へ紹介の一通を書写て更闌る比珠之丞を竊に召よせて杖をもうち裏に示せし趣ハ今ふに又いふに及ばず扇谷家へ汲引の書翰ハ既に写め措つ盤纏も聊取らせべく老兵二名に送らせん其ハ夙めて立を出よかし東国へ赴くべし戦国の常制なれば路に新関もあるべく盗難も亦測がたし姿を窶し微行して非常の患を御ぐを要とせよ就て東国に到るも今の名字でハあるべからず有繋に憚るべきにあらねば末松の松を省き珠之丞の玉を除きて末朱之丞晴賢と名告るべし されバ道家の教にも小人罪なし玉を抱きて罪ありといへり是に玉篇を除くハこの意に称へる也是のミにあらず名を末と陶と文字異なれども和訓ハ等しく是須恵なり又晴賢と名づくるよしハ天も晴ざれバ宇宙暗く人も賢ならざれバ理に明るからず其くらハ人が心術暗からざるよう蒼天の晃々平として晴る如く世々の賢者に恥ざれと今その氏の末となりけるぞかし

文字ぉ表女一の三這名ぉ羞て行状を慎めりと絆示ム事翰ぉ共白如干両を
そ添て取せつゞ珠之次の受戴ぃく坐ぉ感涙の進むを林ぉめ給ぉ御慈愛懇ニ
御洪恩仰謹てうけたまわりぬ膳ぉ銘下心ぉ勤ニ忠勤を尽ニて慨らく啓
遠く七訪問容易ぐるべ一願ぉ自愛あのびてよとぃふぉ與房欽ぐ。ゝらん
あ、安堵そ今ハも是まで久ゝ睡てそ起ると急一立ニ珠之次ぃなべて
多もの難く別を告く臥房ぉ入りをその暁くぉ那老兵ぉ呼覚一饌を
薦めそ客装を整ゑ両人即珠之次ぉ相具ぐ行麓を背屓ぃ笠子を携へ城を
出東を投く。武蔵の河踰すぐ送りゆくめりそ與房ぉ前の霄ぉ窃ぉ分
付たれば是よりそ珠之次ぃ姓名を改めく末朱之次晴堅と云名告りけは

第二十回

鷹捉山ぉ晴賢魔を逐ぉ

亨禄の役君臣乱離も

且説尼崎の城主右馬丞尹賢ぃ香西元盛を誘滅ニ窃ぉ処を復せ一後も
心安うぐる所あり。獨つらく深念をまるぉ元盛既ぉ亡びぐれども涙ぉ呆波ヨヌ野植
通柳本囲友ぉふりゞ密謀を知られるべ縛の難義ぉ及べ一初りけ件の密談を
知りぐるのぉ両箇ぉ過ぎそを矢野宗好と獄舎ぉ繋ぎ一倫児のニ那倫児奴ぃ
欺殺るまく結果けぐれば後産ぃ病ねども心憎ぃ宗好ニ過分ぃ賞禄を取
らせ一ぉ猶もぐろぉ嗤ぎぉ功ぉ誇まる面色ぉ窃ぉを知りく由断一て那奴ぉ口よう
洩されるぃ後悔其処ぉ立かゝりぐんの禍を禳ぉふ不如と腹穢くも思量りく
縄ぉ妻を餌んとせ一ぉ人あそ矢野ぉ生ぉよけん宗好ぃ敬畏ぃ恐ニそ逐電ゑく
迹ニ埋め丹波の八上ぉ赴ぐ。波ヨヌ野備前守植通ぉ尹賢ぐ隠憑の顛末元
盛誅ぐ。ゝ後悔ぐて送恨ぉ勝ぎ。矢野宗好故留
措てその臭ぃ潜びく京師ぉ赴ぐ。弟柳本囲友ぉ對面ゑく。緯云云と報知せ

右典厩尹賢をふいつぐ兄の寃家なること勿論なれども入道殿高國をうふの後、免言三言を信容くいも罪急家臣むごく討せて送恨ふ先や謀友の旗揚して躰ひきもべ。和殿もまく丹波ふ還りそ力を勠せよと萬めふけれ、國友大く主をおもふ。悠そ原来名多比七枚の拒言書を賜りしふ易しふ思もく悔ふけれ宜の趣おろるそと。けまでもよう私ふ忠義ふ兄の枉死を歎ひ日夜ふ猟ふ假托く綱ふ京師を立共ふ覚期を仕らんと恋て植通を遣しその日漁猟ふ假托く綱ふ京師を立退つ。神尾の城ふ有籠つきく兄植通と共ふ近國の武士ふ諜ひ合せ阿波の三好ふ一味て椅角の勢ひを張りひ京師の騒動太くおらび然程ふ三好筑前守元長ふ植通國友が返忠ふ時を得て去歳の夏四月肆日九日阿波の撫養迄蕈のふ故将軍義稙卿の公達阿波の御曹司義維を推て大将軍と稱へを正。故主右京大夫澄元の獨子聰明丸も元服の時その子勝長ふを先鋒の大将とそ。阿波讃岐の大軍を引卒ひ京師を望て攻陸ひふ道ふ水禅門防ぐがふ将軍義晴卿ふ倶ひなりて近江路へ落てあけり。三好ふ即上洛せふ阿波の冠者義維ふ左兵衛督ふ任せられ聰明丸も元服の後右京大夫ふなされかば晴元と名告りける。是より闘戦年を累ねて三好が威勢盛ふ有如之程ふ柳本弾正國友ふ又晴元ふ昵近そさく逆威を振ふのふら三好が権威ふ及ぎるを娟そ晴元ふ諫言あけりふの故ふ晴元長主従の間睦ひからぎる程ふ享禄三年十月晦ふ柳本國友ふ播磨の依藤を攻け陣中ふ召何のふ所ふも知ら召寝首を掻れて亡ぬけり。あまの矢野宗好が所為そとのふのふ兄の植通実事と思ひく。矢庭ふ宗好を斬ふ捕りる。実ハ讒言そと皆え。國友とのひ宗好とのひそのふの終りをよくせざらひ兵悖逆の天罰召。汝ふ生く汝ふ返る因果ふそとのふのる。ふの比高國入道ふ法名道永と改く。

常植と号せしが。頻ゝ三好と戰ひ屢ゝ播磨ゝ赴く。後父弟尹賢と倶ゝ播磨ゝ赴き。浦上掃部助宗村を賴ゝ。宗村輒く相譚れて播磨美作備前之州の大軍を擧ゝ。赤松二郎冠者政村ゝ至來宗村ゝ權を奪れて。その分ゝ有れども無ゝが如く。社家倒ゝ置れる。尊氏を散さえ為陽ゝ宗村の加勢と倡てみづゝ隊兵をゝ。その常植を援け勝ゝ無く。晴元を輔け。遂ゝ尼崎大物の浦ゝ屯ゝ四國を攻んと謀る程ゝ三好元長大軍をゝ阿波より推よせ來る。又宗村が主尊大物の浦ゝ出陣。潛ゝ三好ゝ謀一合をゝ裡應をゝ。常植尹賢宗村いづれも只一戰ふうち屈く。士卒と共ゝ陣歿す。時ゝ享祿四年六月四日。この敗軍ゝ世傳く。大物崩と唱做たり。尹賢宗村が數ゝ折高圍入道常植ゝ辛く脱れそのこゝろ有る紺搔の家ゝ隱れを敵の雜兵ゝ捜出され。廣德寺と號ゝ。大物の材示鋼られ。かゝる月の八日ゝ至く。詰腹を切せら尸。常植死ゝ年四十八。廣德寺の住持埋葬く。法諡を三友院とぞ稱ける。義維晴元長ゝ背き。柳ゝ件の一條。世の人の知る所。軍記の趣を抄錄。こゝろ亦作意を雜へゝ但高圀入道と柳本彈正ゝが支延尹賢并ゝ宗好ゝが終る所。天理の昭々たるほをのゝ懲の一端と。又晃作者の用心と知るべし。間話休題。復說末朱之次第。

晴賢ゝ郡先兵ゝ送られて。廿日あまりの客宿をぞ。武藏州入間郡河踰れ郷ゝ着。城外ゝ旅宿を投めく。衣裳を更め後者をゝく城中ゝ進ゝ入り。管領細谷修理大夫朝興の家臣其甲が第ゝ到りて。陶興房の書翰を出。件の家臣その意を述て對面を請。ゝ件の家臣其甲云云と。同く。介後主君ゝ告えあげゝゝ陶興房ぐそほぐと紹次あるゝ少年子ぐらゞ疑ふべ死のゝゝあるぞ。よゝ興房ゝ告遣。朱之次第を。朱之次と云うんをゝ曲置くべと命せしゝ尸。是ゝより朱之次が執柄の望ゝ叶ひ。ゝ送ゝ來る先兵ゝゝ家臣許諾の報書と朱

之次ノ消息を受とる。別れて備前の三石へ還りけり。却説扇谷朝奥ハ。
末朱之次ノ月俸を沙汰して。且子舎を賜り。小后召出して。これをそだつる。艶顔愛
志。死少年ゆく。進止も疎闊ならねど。近習の後ハ後して。左右近く使れり。有如之
程ハ朱之次ハ。言と行ひを慎うく。精悍あく仕るのみや。一稔ありしかバ。朝奥ひとく
愛欽ひく。禄を増し。格を升して。且くも左右をとゝめ折々臥房ハ果して。二ツ兒の如
出られる。有徒又燕往ハ雁来ゆる。春秋をや。十九歳ハなりたれども。骨太かく。優形ハ
元ゐ。朱之次ハ既ハをや。
そのまゝ額髪を剃除るゆゑ故の侭をそ使れける。戦場ハ扈従して軍功あるハあらざれハ壮園なんど賜らず。後僕一両箇を隷られて。
子舎も君所の内ハあり。一日の休暇をとるごとに。ハ。そを聊も着念せず。勤労他事
なくそれのみ生ハけるやうに。先賞ハ。涙ハお役ハ立つゝのめそと稱て憑く出ひけりまれハよる

朝奥ハ有一日坐遑迹く侍女たち。朱之次をそうく。これまの年来宿願あり。
然ゞも縛の障りヨりくてハ。ゆまゞこれを果さゞる由ゐ。汝ハの爲をよくせんやと。問れて朱
之次ハ此も擬説せず。其ぬく御恩徳を甚深くなり。千里とも遠しとせで推参仕
たる甲斐あくも。ハも親く召使れ四稔の寵遇故老ハ倍く。俸禄ハの多ハ餘を
どものまゞ御恩ハ報ず。一个の功ハを朝ゐ夕ハ羞怕れて。胸休ハらざりしハ。
ハる仰をうけゝるとそ。ひうけるハ。再ハれ及びく。ハとも命ハかけて仕うん仰つけ
らるゝのやと。真実ともそまうさゞれバ朝奥ハ一欸びく。言下の業諾奇特ハ。ヲ
宿願ハ別ハ義ハあらず。且裏ハ黙契道徳と吸れる。抖数行脚の沙門あり。一稔
武藏ハ飛錫ハく。愚俗を済度ハの程ハ貴賤帰依渇仰して。如如来禅師
と稱たり。因くヲも城中ハ請待して。その説法を聴聞せしハ衣鉢飄然として。傳
燈白日ハ如く。梵唄殊勝ゆして。清響塵俗の心耳を洗浄せり。実ハ是濁

世ヨヲ偶ま〻死人間未曽有の活佛なれど粤ふ輪田応報の理りをこゝ悟ら〻と思惟れこゝ宗教世戦囲の觸を一方の藩鎮たる敵を殺し射方を截せ。その罪障無量なり善根を栽ゑもせで生てる子孫ふ福ひなく死てその奈落ふ陥るこそ。いとあはれなり如来禅師の相譚く勝軍地蔵大井百體を造立なりのそ一箇寺を建立せば當身清果自他平等子孫敏昌のよまごろくんとまくもいひ決めかば即ち禅師許諾の気色る。御情願ようとの〻ごも。そを只有漏の縁ゐて真実の功徳ふあらざ。縦一寺を建立せざ一佛を作りのつぞとも。徳を布て民を愍ゑ仁残施して改を正ちく。残ふ勝殺をよ。公道ふまそ。私慾を省ぶこそ。身後ゆそ升天の教こあり。御子孫長久疑ひろ。聖意益の所ゑふ囲用を普して民を苦めのひそと只の顧教化せられこべ。その道理ふ感服く且く当の止りが禅師なるく

東国を去く。今の吉野の山脚る。六田川の上ふ草を締ぢく行ひ澄てそのよ。風の便のめ告えこう。ちくをのそそれ又ゆくこそ思ひるふ禅師の教化の尊それごもこれ聖人ふあらざれこれ如くふ釈ふる。仏を造る寺を建はのようや有漏の縁ゐりとも。それを為さざせぢるふ偏べ。当又禅師ふようを勤ぢく。這宿願を果さんぞとやすの頻うなりけまどもこれ能辯奇才のの代をふぞ。加旃相摸よ西も南も比皆敵地ゆくその往還容易うぞ然るをよく那地ふ到りて主人命を俗ぶ智男のの代も亦治ぐこまで障ありをのそ。当ひろく竊ふ揮むふのの任ふ稱ふのの汝ず外ふあるべうも骨をぬく今ぜ死りあれども汝大和へゆくべや百十数里の敵地を過ぎて主命を俗へ禅師ふ請ゆくヨヲが宿願を果ーるぞ。その功績莫大るうん賞ふ宜くをふ依ーて心を定ゆく言兼せよ。とひろ入りつ答えのふを朱之攸ふあるをるく皆果て頭を擡げ

弱冠未熟の某を人ぶまく思召れざれば仰のあるべしやは縦敵地にはとも凡
霜露の降る所舟車のゆき所なるが姿を窶し方便をもて山をも河をも踰
ゆべし。只心のとるべき件の如如来禅師とゆらん造佛の義を許容あるとも老體
百里の往還を斁ふく。菴室を出ぐしと宣ひ給ふらん歟尊慮奈何。
問まうせば朝臣のぬし感嘆して。これ初より汝が才幹。あるべしとおもひ。そのいふ所
果して違ひぞ。禅師こゝが意を納ぬありて。造佛の義を許されるが東國へ伴ふに
及ばざらば。那処において事を剏め。堂塔も亦彼山の邊において建ぬのことよりて這
回ハ。沙金五百両と白布二百反を贈遣して。造佛の料とせん。この餘堂塔建
立の諸雜費ハ百軀の佛像成就の比洊て齎し遣してん。今この件の金と
布を吉野まで運送せんに道中幾十数の従者を要するや。摠て汝が望に任
せん。宜攷定むべしと亦他支もなく急れて。朱之介ハ脱る路なく。要時頭戔

傾けく。逆旅に多人数なるものハ還て人に怪られて障りになるものゆへ。有恁ハ布
とおん金ハ韓櫃二前ばかりに藏めて。是を舁ものの七八名別に宰領一名を添られ
るが。縡足るべうもやゆへん。扨某ハ山伏の峯入するごとく打扮て大約這八九箇の
従者をねて路を急がば。誰か怪しく禁むべき。輙く那地へ到らんこと何の疑ひか
ゆべきこの義ハ御心やすかるべしと憚る所もなくまうしたるが。朝臣のぬし大く感じて。適
微妙く計ひにけり。むかし義経の奥州落も主従山伏に打扮て安宅の関を踰
たりこ歟。顧ふに汝ハ今の世の牛孺丸とのいまくのこと速に准備して遠からざる途
させんさばれ那首に到るとも禅師の許容あるまでハよしや一年十箇月逗留する
ともけまうはおらぬ。倘然る時宜に及びるが。無用の従者ハ皆返して。縡の便宜を
はなく報せよ。脱落あるべきのみならねども。よろづの進退肝要ハ只管憑む。忘恩切
なる。主命送もなるやうが。朱之介ハ言兼しつゝ准備の為に退りけり。却説朝臣ハ

當直なる老黨を召しまして件の趣を説示し如如来禪師へ調進の件々を整へくたまく朱之介に遞与せべし。その餘のものは恁々と辭せしく命じ給へば件の老黨奉ゆて下知を彼此に傳へしかば日ならず物みな整ひて盤纏も多く遞与しかるそが程に朱之介は兜巾篠懸金剛杖摠て修驗者の打扮なる客装を整へて主君に別を告なり宰領に立られる杖月乃介といふ雜色と年来その身に隷られる坊二郎といふ小厮をもて四箇の奴隷に両前の韓櫃を舁し送る四箇を輪遞と定めて此彼共に十一名よりの年の秋捌月の初旬に起行して大和路投て急ぎけり豫て計ひしなるれば通路の城下新関も障ることなくなりて。その月は望の比吉野山の麓なる六田の郷に著しかば郷の客店に宿投定めて逆旅主人を呼近つけ默契如如来禪師の草菴は何処ぞと諮るに主人答て禪師の住せる処は這六田川を渡らせ給ひて北六田と比曽寺地の字の間なる山里で行へば

路程遠くもあらねどけはしかれや黄昏なり今宵より精進潔齊して夙めて訪せ給へといふ朱之介うち笑て渠何をいふやらんとおもへどもその意に任して敢亦魚肉を用ひずさばれ兜巾篠懸なるとは逗留の間に要なしとて皆脱捨て野袴を穿たりけり。有恁而その翌旦朱之介は行水して夜裳を改め二前の韓櫃を八箇の奴隷に舁し先に立つて乃介坊二郎を得て北六田のかたに赴んとす登時逆旅主人はしらえ奴婢ホもなべて朱之介ホが真の修驗者なるゆゑをもて疑惑ざるものなければとを乃介に耳に問ふに乃介答て否疑ることにはあらず原是大諸侯の使者なれども輙く敵地を過らんなるに假山伏になりたるは必ず怪しそと明々地に報しかば衆皆初て心おちゐてゆゑてび介意せざりけり既にして朱之介が出てゆらんとせし折に主人はこれを送るとて急に袂を掖とめ島許がまくおやさんが凡俗のかん身ゆゑ精進潔齊なるゆゑとも深信堅固なるゆゑれば禪師に御對面は愜ひかた

ヲヽキ　コヽ
喝食ハ行
童ノ俗ヲ
ヒキヽ
僧ノ徒
ヒキヽ
童形ヲ
ノミヒキヽ
ヒキヽ
ノ出像ヲ
ノセヒキヽ
ヒキヽ
ノ贅ヒキヽ

べし。あの義を念じのべかとふを朱之奴応とだろふ回答しそもそも捨て急ぎけり然程ふ朱之奴ふ六田川をうち渡りそ北六田と比曽寺の間なる山里ふ来りく禅師の菴室ハ里を去ること十町許樹柏深き岡なりとふあり進み近つきく且なるふ這柴門の正中ふ空奔の二字を書たる一枚の牌を掛出して裡面より固く鎖したり當下朱之奴ふ内よりせいらふぬ声ふ応せず呼門ども且くハ応せず呼と半晌なりのちく急せハ後者ふいでろなく声を合して呼門ども且くハ応せず呼と半晌なりのちく年十七ハ八なる喝食の奥のくより歩み来り戸節の内敷より覗窺く来る所のハ誰と問ふ朱之奴ハ腹立さふ一入声を荒く立く呉ハ東路よりはるぐと禅師ふまうさんと欲ふ上ふありく主の使ふ立ていでたるのへそれよりハ客ありとふを喝食答へ師ふまうさんと欲ふ上ふありく主の使ふ立ていでたるのへそれよりハ客ありとふを喝食答へ又会てすぐ師ハ近属菴を出く葛城山ふ籠りゐたりとふ這柴門ふ空奔の牌を掛さる帰菴の程ハ測かりそく東囲へ還りのべとのべども聴ず朱之奴ハ元ハ戸際ふ身を倚せそもそも本意ふあらねバ禅師ハ菴在さぎとも主命ふ依く千里を辞せざるまでハ来ぬるをとふしてぐふやハ還らるべき旅宿ふ退りそ帰菴を俟んさでも見参ふ入のがさハ葛城山ふとけ登りく在処を尋ねなんとのふを喝食推察ありく疑ひのある労して功なしかぶ師の山ふ入りゐふ或ハ吉野葛城或ハ熊野高野の奥一日も処を定めハむとそもそも時の両三箇月遅ハとハ一両年菴ふゐるべきのを何処を投一宿ぬべきの当日ぐ師のふ折吾俤をえらの是宜ひい近き日ふ東囲ふ帰菴ふ

扇谷朝興ぬしの使者末某甲とて青侍来訪せん凖ハ尚縁なきもの遠ざかくし去せよ凖凝よく逗留せバ竟ニ東国へかへりぐ托柾難其身ニ寅縁るともらんなの義を傳へ史と窃ニ示しあひなる有恁者を多くかへりなへ盟ニぞと窘めて踵を旋らし奥ニ入く呼べどもゆるひ出くまき朱之介ハせんすべなさニ又韓櫃を舁て河を渡まで六田の客店ニかへりけれバ主人ハ遽しく出迎へてふ如如来禅師さるニ御對面ハ欲と思れく朱之介ハ憂ニより。箏云云と説示まと主人ハ聞て眉を顰めて那菴室ぬ喝食あり初より禅師の独住せまをもって他御ニ出させのを日ハ空菴の間ある留守する者ハなき該なるニその由ハなるぬなるニてぞ汝へ憶ひふその喝食とてんえくなも是則禅師さまの對面許しがくるよしを諷へて示しあひニあるもやとまうれかくまれ御逗留ハ命るべきなりとも覚をかへさせなきニ優とおもいと死実へおもく諌しかども朱之介ハ従はきってれ主命を稟なからいまぐ禅師の面をみむまして何処へそ

欲還るべきのし喝食が禅師なしが狐狸ニちかしく化るなんらん本の形であらんと見。急ふうちへ入く對面せバ脱るとふよしあり人べしとのひつ従者ホとえくぞて望ようして汝達ハ迭代ぬ那首よなへく日々に菴を窺って禅師の菴中ニ在りとみバ走りかへりそのよれを報せよ脱落なきそと分付れバ衆皆斉一その意をゑて形のごとくニまいりける。有恁程ニ捌月ハ過て玖月中浣ニなりしかど禅師ハ菴ニかへりあるぞなら汲だニ。旅ハ寂しきもの玄なニ日影短き秋の宿降布く木葉门の霜鄰ニ疎き山里なる昏ハ松風夜ハ鹿の声よりも外ニ友もなく寤ても寐ても徒然ニ堪るぞなり朱之介ハ懊悩として樂まず心頻りニ焦燥く肚裏ニ思ふやうこれ河喩ニ在りし日ハ主君と共ニ起臥なく鄙語ニいふ晦知らバ銭帛をまニ取らねども衣食ニ餘りありけるニよしなき使ニ立られて客店住ひの不樂しさハ三ぐびの饌も豆腐のミ薄き蒲団ニまの夜寒を凌ぎ難るハ罪なくて配所の月をみるま似なり。然バとて今ゆくふかへるも還りがくなり。

進退あやふき谷の如くなりしかば、一同に苦しみ死なんと胸ふさがりしが、幾日数を歴る程なく忽地に又安き啓行比の主命なれば那地に到る時宜よろしく逗留数月なりしが、無用けのごと返してよしと宣ひしかば、ある夜韓椎舅八名を四名の返しとなして、ひそかに佐竹の後ろ安房国へ立越べしと杖月乃刻ふ商量しつゝ奴隷ふぜいに云ふ如く半分は残れ、この日来共に苦労せし衆皆弁一願なれば、この彼決著せまじきものゆえ、半分は残れとの事なれば、衆徒然ふひへ武蔵の如くふぜいに遅るゝものゆえ、半分残し送れるのいつぱせん鬼鬼嶋ふ蹉跎せし後寛ふ似ていつまでも堪ぐべきにあらず、願ふ送ふ返させ奥よりや禅師の帰菴ありそ。韓椎を早のるとも川一條を渡さまじきその折ふ里人を傭ひ求めて事ふ済むべし。一たび武蔵へ立入らば又あん迎ふまゐりそれも廣大の恩悲之義理の処と諸声ふ悲ふなりて已ざりけれが朱之双ふさもとそ又乃双ふふようを示そ。件の八人を返し遣し只乃双と坊二郎の留めそ韓椎を守らせんとふ商量決定

巻ぐりふ又隷仆ふ多勢ひしめき別を告て詰旦山の端遠くあらうふ東へ立去りぬ。これ是ろくの人の暴くふりて寂く尉ふ世ーのもあれば今茲とあふてまとも禅師ふあるぞ此ふ便宜ふ志と扇ーそみづから件の草菴の周りふせとの柴ふ鎖されば此ふ便宜ふ家ふ年九ッの比まで在りけれ日毎ふ弓箭を持て来つるものふあり碧立ふ未明より彼山ふ猟ーて日来の鬱ふ気を散さんぱいとそ躰く准備ふその霄乃双ふ云云ーを告留守を未女ね和敵獨で実ー

敏ふ坊二ふ持て来つるものふあり碧立ふ未明より彼山ふ猟ーて日来の鬱ふ気を散さんぱいとそ躰く准備ふその霄乃双ふ云云ーを告留守を未女ね和敵獨で実ー

投もせず大和ふ山又山のこれふ猶丈夫ふ断の守えあり。ふの六田川の北方ふ雁鳥捉山ふ異鳥ヨヘく猿猴も鬼も少ふ人の

のこーふもものなんぐれ河踰を告時略ふ山賊を御ふん為角弓ふ箭を弦ふ添て壽裏ふ

かくんぐ翌の獲のめ鳥まれ猴さまこ美ぬく酒を飲せん霊妙時の程そ心そうけよ。
とのそ乃双の宿あんぎそ宣のするとそぐう。如如来禅師の活仏る。神変不思議の噂
あり。そのて精進潔斉深信堅固うぐれぱの法顔を拝をぴて。とその主人も
ふしふあぐぎそ。然まで歩あうびとも今その帰庵を候うう。殺生を忌て遊びてうぱ。
禅師いかよく忌避のひく拝顔のうひぐこのるべーぷのぎまりめうと諫ることの老実恥
まどる。朱之双の才を眉て人を非とする本性の。その時ふ稍顕れて陶與房が教訓を
うちと忘れけん冷笑ひく。女々者そのそのめうる出家の出家の行ひあり。武士の武士れ
務あり。殺生の五戒の第一出家のこれを保べく破るべくぷ在家ふ何の憚りあらん禅
師を深仰そ。戦場ふ臨を敵ふ敵ふ殺生せどのこ念ど敵ふ敵ふるのの
ひうある畢竟る理ふ暗兎愚俗ふ共ふ論ぷぜうる。禅師い実ふ活仏そうぎ。その
理りふ点頭そ。必許しゆべられさいりぎそ。と説破れば。乃双の終ふ争ひひて。室ふ

然へと佼けり。却説の翌朝朱之双の野装束て角弓を挟む坊二ふ箭を負
ひ。昏鉋の割篭を持ちなどろ未明より宿を出る。鷹捉山ふ赴ける時ふ什月の
中旬りければ疎林枝をまぐえそ。僅ふ翠微を見ー白雲出没そ高く峯上ふ
かかゆる。渓ふ落葉ふ降埋れく。音ふもそ。鳥ふ古巣を出ぞぬりん。
声稀ふあそ影遠る。羊腸る樵路ふ。枯草を結びるの是何人ぞ。栞そ。
嵯峨る山峡ふ怪松の生出るふ造化の工做せる。山静ゆく。短景と賞そ巌
累とそ長藤ふ攀るる得ふ趣るふあらねば朱之双の是首ふ奉走。彼景ふ
渉猟りそ。兎一隻そ獲うめば猶も佳境ふ入らんとそ下晡ふるまでの遅る
ことを恐てうる。浩然よ左るのくる。枯芒花の中よりく。一隻の麌の走中ーを
朱之双ふ遣も過さぎ弓弯固めく。漂と射るふその箭の寛ふ違て麌の後
足を射削りけん倒れんとーて遂ふ仆ぎび足を曳つく逃走るを。急ふ脱さでと赶ふ

宿山朱之双射妖怪
出像第廿六
美少年録二輯巻五
廿五

程に。大約五町あまりにして。何処ともなく飛来りけん矢(?)ひとすぢ来りけり。正しく射られと思ふ物を走ら
せしを悔しけれ。精竭てかば必倒れん。是首欲彼首欲てさるに。よく山深く入ゐを
覚ざりしが。朱之丞は稍時深山を奔走まりしが。かゝる時にも足逸早に坊
二は後より陸て来ざりくる程に。黄昏となりぬ。かゝるに路の遠ければ。朱之丞は心慌て
麓へ降らんとて急げども。舊来一路の定ならねば。日はくれて暮つ天さへ曇りて。出
べき月の出ざれば。又いかにともせん術なし。頻りに声をあげて。坊二々々と呼れども。絶て
応をせざりしかば。渠は麓に候なるらんと思へども。心安からず。素より膽太き壮佼なる
ましば有恁けれども物ともせず。腰に著たる嚢裏より燧を出し。火を鑽て落葉を焼て
四下をみるに。彼此に細竹多くあり。是究竟と伐とりて。手を多く束ね。焦火にして路を
索くれども。いまだ麓の方に出ざりしかば。前路に石室あり。立よりて熟視ば。
洞口は五尺可。奥へ入ると六尺に過ず。太古穴居の迹に似たり。この時天晴雲斂
りて隈なき月を瞻仰るに。夜は未だ亥中になりにたり。且くここに疲労を医して暁
るを待て。又路を索つゝ徐に麓へ下るべしと尋思つゝ。蕉火を振滅て室内に進入
弓箭を側に引つけて坐しつゝ。その天の明るを俟ほどに。丑三ばかりと思しき比。遠く南の方に當て
女子の叫ぶ声しけり。朱之丞は耳を欹て。怪しむべし夜の深山に女子の泣く声の聞ゆるは
渠山賊に擒攫れて。ここに来るにやあらん。果してあらばこの石室は其賊の
巣穴にもやあらんずらん。さもあらばこれ此の傍にしばし在りて。便のよからん箭前間近く躱して。
且その為体をみんずものをと。弓箭をとり揚て。遽しく室より出れば。その声漸々に近
くなりたり。何処にかあるらんと見るに。室の前面に小松の繁りたる。徧小なる岡ありて。間遠から
ざりければ。走登りつゝ弦衛潤して。今やくと候ひける。畢竟朱之丞は癖者を射仆
すか。件の女子を拯ふや不や。そは第三輯の初の巻に解分るを俟て聴給ひね。

近世説美少年録第二輯巻之五終

○曲亭翁著編近世説美少年録第二輯画工筆畊劇人目次

出像

淨書　谷金川

剞劂　朝倉伊八

原喜知

家傳神女湯　一包代百銅

曲亭老翁讀書研究の餘業として稗史小説を著しその世の婦幼を勧懲せしの書今に至て大小二百五十種も冗藉る。大凡翁の著書の稿本精密にして真名仮訓ヲ一切に三十五六字或は四十字を書るもおのおのその書画の備ふ及剞人の良きを擇びまもられ翁の意ふ悪敷をも疎漏拙芳の剞本ゆ比べ本房所用の本銭十倍百倍ヘ莫くく江湖の看官并ゆ賃書主人魚目をのて明珠ふ混ることく莫耶と鈆刀とその價のおのずからなるよりも亮察をヲ乞く購ひもらんことを惟祈りまつるのみ

己丑麥秋望毎　江戸書賈千翁軒敬白

繍像復讐岩見英雄録　全部五十冊

南溟玉藻主人　編輯

浪花一蘭斎歌川芳梅　画

○初編　永卿人作ノ二編　玉藻主人訓著ノ三編　東陽子翻著ノ第四輯以下作者一家

永録天正の頃筑前名嶋の三男主岩見重太郎橘種李ガ生まれより武者修行せし一世の武功大蛇の害を除き老狸の妖を殄めー勇威を揚め後ま天の福を受くる庚申成就大川ホ三人の大敵を退治して父兄の怨恨を晴し絶ふ室町殿ホ奉仕て任官し給ホ至水正ヲ後盤石る如く固ふ治まる事ヲ図ふ及邪濫婦岩濱孝女新月ホがの給ヒ黨の五雄と称する雪上の列像靈猿悪鬼の怪談ホ五輯あり八益入佳境新話多り

南久寶寺町心齋橋北ヱ入

伊丹屋善兵衛　板

江戸　玉蘂堂　須原屋茂兵衛
京都　勝村治右衛門
大坂　河内屋喜兵衛
河内屋太助
河内屋茂兵衛
秋田屋市兵衛
浪花　心齋橋北ヱ入
伊丹屋善兵衛
名古屋　永楽屋東四郎
永楽屋東八
永楽屋東助

此書ハ文化十一年甲戌ノ春ヨリ発兌ノ筈ニテ予メ広告ヲ出シ置キシニ其年ハ故アリテ延引シ翌十二年乙亥ノ春ニ至リ漸ク発兌ス

文化十一年甲戌ノ春ヨリ発兌ノ筈ニテ予メ広告ヲ出シ置キシニ其年ハ故アリテ延引シ翌十二年乙亥ノ春ニ至リ漸ク発兌ス

此書ハ文化十一年甲戌ノ春ヨリ発兌ノ筈ニテ予メ広告ヲ出シ置キシニ其年ハ故アリテ延引シ翌十二年乙亥ノ春ニ至リ漸ク発兌ス

製茶并　神田明神下
同朋町東横町　瀧澤氏
弘所　元飯田町中坂下南側第二の向　たき澤氏